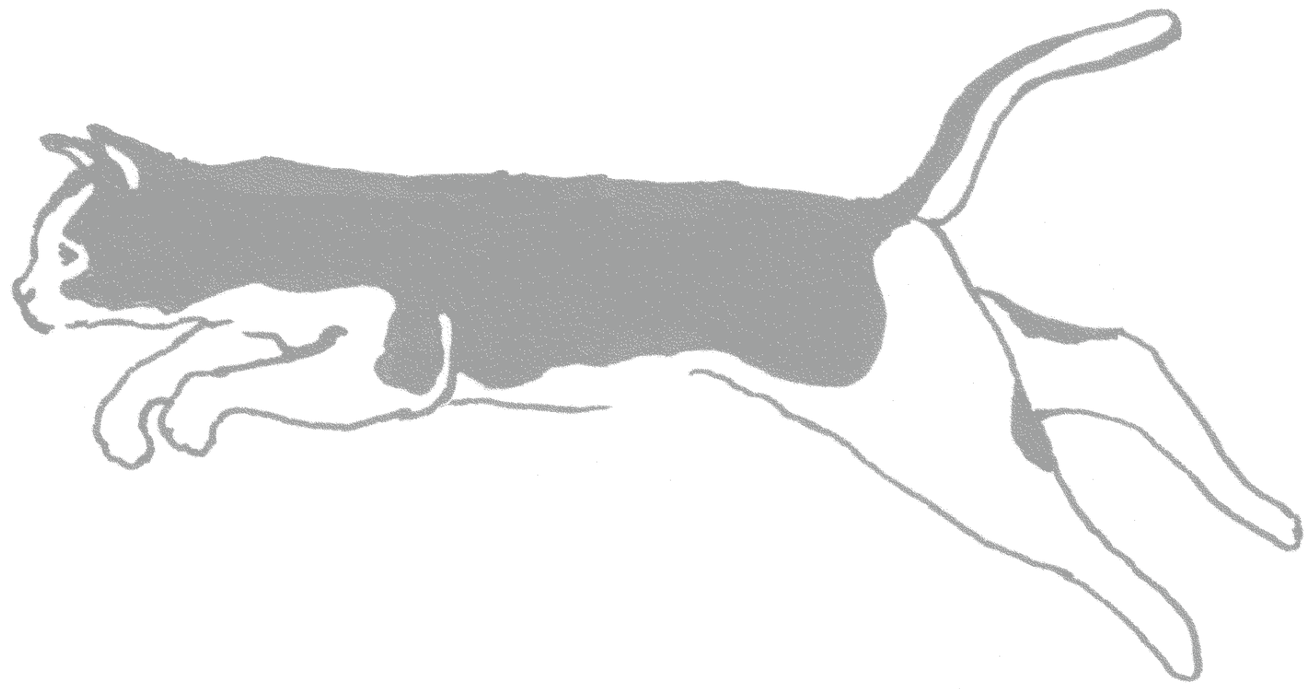

試し読み

黒企業顛末記

知古文庫

当ファイルを許可無く印刷またはインターネットを介して
第三者へ配布することを禁じます。

試し読み

Copyright © 2017 ChicoBunko All Rights Reserved.

黒企業顛末記

Copyright © 2017 ChicoBunko All Rights Reserved.

試し読み

ことばなんて、心もとない。

ことばは形がない。ことばは口にした瞬間、音に変わる。音は霧散して、すぐに忘れてしまう。ことばは曖昧。ことばは裏切る。ことばは嘘をつく。

一枚の紙に尽くしたところで、どれほどのことを伝えることができるのだろう。どんなに丁寧なことばで書いても、読むひとに伝えたいこと、すべてを理解してもらうなんてできるだろうか。

「私はこういうひとです」と伝えようとする。わかりやすく、簡潔に、たしかに不足なく。それでも、私が書いた文面は、人格、経歴、すこしも誇張せずに、誠実に伝えることができるだろうか。書いてあることがすべて事実だとして、読むひとは、どこまで読みといくてくれるだろう——それに、湾曲せずに、過小評価も過大評価もせずに、理解してくれるだろうか。文字になっただけの、私の履歴で。

ましてそれ以上に、このさきなにが起きるかなんて、だれだって、わからない。だから、

Copyright © 2017 ChicoBunko All Rights Reserved.

試し読み

そのとき理解していたとしても、そのさきに、思っていたのと違うことが起きてしまうと、「こんなはずじゃなかった」なんて思ったりするんだ。未来のことがわからないのは、あたりまえのことなのだけど。

ことばって、想像力とあわせて成立するものだ。

「月給幾ら幾ら」「業務内容あれこれ」云々……固定された表組につめこまれた情報でわかることなど、そのあと知ることになる未来の、何パーセントになるかわからない。

求人票を本格的に吟味するのは、就職活動をはじめたとき。経験があれば、書かれたことのほかにも「こういうこともあるかもしれないな」って、想像できるかもしれない。けど、たいていのひとは、何度も転職をしたりすることなんてない。

直感って、信用していい。

ときによって――天気がよかったり、体調が悪かったり、気分がすぐれなかったり、月の満ち欠けだとか――敏感すぎたり鈍感すぎたりコロコロ変わる。それは、ひとによってさまざまだし、直感ばかりで判断するひとも困る。頭のいいひとには「立証されていない感覚なんて信用できない」と、切り捨てられてしまうかもしれない。

五感は、なにかの事故や病気で失われてしまうこともあるし、生まれつきどれかが不自由だったりすることもある。けど、資質によって差はあっても、まったく直感を持っていない

Copyright © 2017 ChicoBunko All Rights Reserved.

試し読み

ひとなんて、いないのではないかと思う。

ことばで理解したつもりでも、そこから想像できるひとときできないひとで、そのさきがまるで違ってしまう。想像力は、ひとによって能力の差がおおきい。他人がどう思っているか、すぐに想像できて、思いやれるひとはいだろう。好転すれば、偉くもお金持ちにもなることができるかもしれない。けど、度を超すと、思い込みのようにあれこれ考えてしまって、身動きが取れなくなったり、他人に迷惑をかけてしまうこともある。想像力が乏しいと、ことばの真意を汲みとれない。不器用で、ちょっと世のなかを渡りにくいかもしれない。

それにくらべて、直感っていうのは、ずっと安あがりなんだ。

だれでも持っている感覚だし、なにに対しても「なんとなく」直感が働く。たとえば、はじめて会うひとでも、そのひとが快か不快か、話すまえから「なんとなく」感じている。

私は、直感って時間の問題なんじゃないかと思う。処理している時間の短さ。なにかを判断するときって、そのひとがいままで体験してきたこと、よかったときのこと、悪かったときのことを吟味しながら決断をする。直感って、考えている時間が短いだけのことのような気がする。瞬間的に脳が過去の体験を計算してはじき出している。ことばとか、文字にするには時間がかかる。すごい処理能力が脳にはあって、それが速すぎて、さきに「なんとなく」感じるものがやってくる。

Copyright © 2017 ChicoBunko All Rights Reserved.

試し読み

時間をかけてことばにすれば理屈になる。ことばにせずに（または、できずに）すぐに行動に移してしまえば直感になる。違うのは、ことばにする処理時間が足りないだけ。そうやって考えたら、直感って、とってもあたりまえなもの。けど、ことばで表現していないから、論理的にみえないんだ。

だいたい、どんなに考えても答えが出ないことだって、たくさんある。直感で判断したことは、ただの趣味だったり、自分の趣向なのかもしれない。あ、これはイヤだなとか、カワイくないなとか。けど、どんなに時間をかけて、じっくり考えたところで「なんとなく」イヤだとか、「なんとなく」カワイイとかで判断しないとは云いきれない。なんでイヤなのか、どうしてカワイイのかって、どこまで理屈で説明できるのだろう。突き詰めて考えても、やっぱり自分の好みだったりする。ほかのひとに訊いたら、「私はイヤだと思わない」って云われるかもしれない。だったら、論理的にことばで表現する必要なんてないんじゃないかな。直感的に、アタマでわかっているんだから。だいたい、なんであのひとのことが好きなのかって、いくら考えたって、なんとなくしかわからない。

Copyright © 2017 ChicoBunko All Rights Reserved.

試し読み

「まだ1年足らずじゃないか」
「――けど、やってる仕事、もうなにがなんだかわからないのだもの」
「経験はないけど、『やってみたい』って云って入った会社だろう」
「――けど、それに、私、やっぱり印刷のほうがいい」
「Webは向いてない？」
「――そう」
「……それにしても、ちょっと早すぎない――」
「――けど、けど……」
会話はとりとめがなくなって、しだいにあのひとの声もあきらめ混じりになった。
学校を卒業してから、ずっと派遣社員で働いてきた。とくに理由はない。通っていたデザイン系の専門学校はたのしかったけれど、学校から促されていった就職課には、勉強していたことはなにも活かせそうにないような求人しかなかった。専門職というよりは事務職。どうして、専門学校にこういった職の求人ばかり入っているのか疑問だった。みずから探して応募した求人は、どれも撃沈した。景気が悪いこともあるのだろう。私の実力もあるだろう。そもそもがあまり知名度のある学校ではない。卒業後はバイトをしたり、事務の派遣社員をして食いつないでいた。夢も希望もいだいていたわけではない。でも、いずれは勉強したデ

Copyright © 2017 ChicoBunko All Rights Reserved.

試し読み

Copyright © 2017 ChicoBunko All Rights Reserved.